

①研究主題名

「伝え合う愉しさが実感できる『話すこと・聞くこと』の学習」
～自分のことば・相手のことばのよさに気づかせる指導を通して～

②主題設定の趣旨

ア 主題の意味

（ア）「伝え合う愉しさ」とは

「伝え合う愉しさ」は、自己表現ができない、あるいは、自分の話が聞いてもらえないといった状況であれば、実現できない。入門期の1年生では、言いたいことが言いたいときに言える。それを聞いてもらえる人がいることで、児童は楽しいと実感する。基礎・基本期（2・3年生）では言うべき事が言うべき時に言える姿を目指す。正確に伝えることができたことに児童は満足し、一つレベルの高い愉しさを味わう。発展期（4・5年生）では「聞き手」として成長した姿を見せ、相手のことがよく分かるようになる喜びを味わう。さらには、次第に自分の考えをより正確に、意図したように伝えることができるようになり、自分のことを分かってもらえる愉しさを味わう。最後に、完成期の6年生では、言いたいことが言いたいように言える、自在なことばの使い手を目指す。このようにことばを通して日常行っている「話す聞く」言語生活の質をのびのびとした「楽しさ」から正確性・豊かさの増した「愉しさ」へと、授業によって計画的に高めていくことが本校の考える「伝え合う愉しさ」である。

（イ）「自分のことば・相手のことばのよさに気づかせる」とは

文字言語は、記録に残せ何度でも読み返すことができる。したがって推敲等により自分のことばのよさに気づいたり、友達の作品を読んで相手のことばのよさに気づいたりすることが可能である。それに対して音声言語は、その場で消えていくという性格があり、日常の音声言語活動を記録に残すことは通常行われていない。しかし、小学校入学以前からすでに聞いたり話したりできる力を持っているので、1年生の4月から文字言語より一足早く伝達の手段として使うことができる。また、家庭や地域という温かい環境によって培われた言語であるので、児童にとっては、使いやすい、自分の気持ちを表現しやすい、体温に近いことばである。相手とのやりとりにおいても、即時的に交流ができ、伝わりにくいと感じたら、その場で付け加えや修正が可能となる。特に道具も必要としないが、物を見せたり、ゼスチャーを交えて話をすればさらに効果が上がる。また、ことば以外でも、表情や音声の音調で伝えることが可能である。さらには自己紹介のスピーチや校内弁論大会等、文化的な行事の中で発表の場が保証されているのも特徴である。上記のような音声言語ならではの特徴や良さに留意して教師が活動を仕組み、児童に文字言語のように学習の対象として意識させることにより、自分のことばのよさや相手のことばのよさに気づかせることが可能になる、と考えている。

イ、これまでの研究

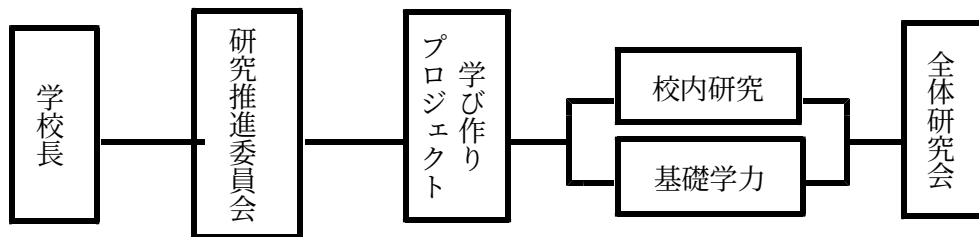
本校では、過去3年間、「読むこと」の領域の中の読解力を確実に身につけさせることを主眼とした研究を進めてきた。特に一昨年度は、「読むこと」の指導に「書く」活動を取り入れることで、活動はあるが、学力は付かないという授業にならないように、確実な読解力を付けさせる授業実践を図ることで、研究主題に迫っていった。その結果、各学年、「読むこと」の学習に対する関心が高まり、読解力もしだいに身に付いてきた。昨年度は、「書く」ことに焦点を当て、低中学年は書き慣れが進み、高学年では、多様な表現の方法を愉しむ姿が、見られるようになってきた。

ウ、今年度の研究

そこで、今年度は、これまでの「読むこと」「書くこと」の活動を通して読解力や表現力を確実に身につけさせるという研究を更に発展させ、「話すこと・聞くこと」の領域を中心に据えた研究を進めることとした。

③研究組織及び計画

○研究組織



○研究の方向性

- ・1年間の指導を通して、場に応じた話し方に慣れ、のびのびと話ができる児童の育成
- ・能力表作成と年間計画の検討
- ・児童の自分の思いや考えを上手に表現したいという欲求や願いを大事にした学習指導
- ・短期集中指導ばかりではなく、一年間・一単元・一時間を小さなステップで継続的に指導
- ・児童の話したい聞きたいという欲求を刺激する目的、相手、場の設定やサンプルの提示
- ・個に応じた教材の作成と視聴覚機器の活用
- ・他領域（読解・作文）の中で、ペア・グループ・集団での話し合いの技能を活かす指導
- ・明確な発音・発声をねらった国語タイムでの発声トレーニングと豊かな音声表現をねらった音読発表会
- ・聞く耳を育てるモデルとしての教師による「お話し読み聞かせ会」や放送委員会による毎日の放送指導

○研究の仮説

自分のことば・相手のことばのよさに気づかせるような音声言語の教材化を行い、指導目標を焦点化した指導を行えば、伝え合う愉しさを味わえるような音声言語表現力を育成することができるであろう。

○研究の内容

- ・「話すこと・聞くこと」能力表作成、年間計画の検討
- ・指導目標を明確にした（＝指導目標型活動単元的）授業作り
- ・視聴覚機器の活用や「話型・聴型」作り等、「話すこと・聞くこと」に関する環境整備

○研究計画

月	研究計画	同和教育研修計画	月	研究計画	同和教育研修計画
4	研究主題、内容の確認 研究組織の再編成	生徒指導、教育相談部会の開催	9	全校授業研究会	
5	国語教室経営案検討 学年別指導目標作成 帯タイム年間計画の検討	（月1回） 県、郡同和教育研究会参加	10	全校授業研究会	
6	帯タイムの実践 講師招聘による研究会		11	全校授業研究会	人権集会
7	指導目標型活動単元案作成		12	全校授業研究会 授業実践の整理	（2回目）
8	指導案検討 指導案検討 「話型・聴型」表作成	人権集会 （1回目） 教育相談事例研修会	1	なかよし、ことばの教室 授業研究会	同和教育視点での道徳の授業実践
			2	1年の研究のまとめ	ボランティア集会
			3	来年度研究の方向性の検討	

④期待する研究の成果

- ・「話すこと聞くこと」能力表の作成、年間指導計画の検討をすることで、継続的・系統的な指導を行うことができる。
- ・指導目標を焦点化した指導で、学級や一人ひとりの児童の実態に応じた指導が展開でき、のびのびと話せる児童の育成が期待できる。
- ・他領域（読解・作文）まで視野に入れて指導することで、話しことばの能力活用と習慣化を図ることができる。